

若子の死 （北新書局版『雨の日の書』増補）

若子、字は霓蓀、中華民國四年十月二十三日午後十時に生れ、民国十八年十一月二十日午前二時を以て死亡、年十五歳。

十六日若子は学校より帰り、晩に嘔吐腹痛し、自ら盲腸なるを知れり。然るに医師誤診して胃病と為す。次の日復た診て初めて盲腸炎と認む。十八日送りて德国病院にて手術をするも、已に腹膜炎を併発して、遂に起たず。手術の後、苦痛少しく已むも、熱は降らず、十九日午後益すますます煩躁を覚え、晩に至りて忽として啼きて曰く、“死んでしまうよお”と。継いで昏嚙す。樟脳油を注射するに、旋ち清醒して常の如し。迭いで兄姉弟妹の名を呼び、悉く招びよす。唯兄の豊一は東京に留学して相見ゆるを得ず。その友人亦至る者有りて、若子は一一招びよせ、唯医師を痛恨して置かず、常に両腕を以て方く母の頸を抱き低く語りて曰く、“かあさん、わたし死にたくない”と。然かれども終に死せり。ああ、傷しいかな。

若子の遺体は二十六日西直門外広通寺内に置き、明春西郊に地を購いて安葬せんと擬す。

わたし自身はとつくに不惑を過ぎた人間であるし、妻は代々禅宗の教を奉ずる者で、はなはだ深い迷妄を減ずることはできるはずである。しかし物を見て人を思うのは、人情の免れざる所で、ましてや臨終にも神経明晰であってみれば、すべての言動がありありと心に残り、折りにふれ一たび思い及べば、まるで腫れ物に触れたようで、時には不思議に思われる。こうした情景は、思い返すさえ堪えがたく、ほんとうに当時どうして我慢できたのか分らない。今ようやく初七日を終え、筆を執って若子の死の前後を記そうとしたのだが、やはり不可能な事である。あるいは結局は永久に不可能な事であるかも知れない。わたしは以前「若子の病気」を書いたが、今日は「若子の死」を書かざるを得ないのだが、これはどうしても書けない。この篇は結局題だけで中身の文がないのであろうか。ただ若子の生卒年月のみを記して記念とする。十一月二十六日葬送より帰った夜に、豈明附記す。

『雨の日の書』初版に載せた写真は五年前のものであったので、今は撤去して改めて若子の今年撮った遺影を載せる。これは八月十七日北平で撮ったもので、死の三ヵ月前である。又記す。

※初出：1929年12月4日『華北日報』副刊第218號